

日本の文化を残すという使命

金剛流二十六世宗家 金剛永謹さんに聞く

(一九七四年大学文学部卒業)

ききて
N・J・ティール

(女子大学文学部教授)

六月、能楽シテ方金剛流の拠点となる新金剛能楽堂が完成しました。四条室町から、能とゆかりの深い地、京都御苑の西・烏丸一条へ。同志社の今出川キャンパスからも徒歩五分ほどの距離です。百四十年ぶりに移転新築された新能楽堂で、金剛永謹ひさのり二十六世宗家に、能に造詣が深いN・J・ティール教授が展望などをお聞きしました。

新たな歴史を刻む能楽堂が完成

ティール 新しい能楽堂の落成、誠におめでとうございます。
金剛 ありがとうございます。

ティール 落成にあたっての心境はいかがですか。

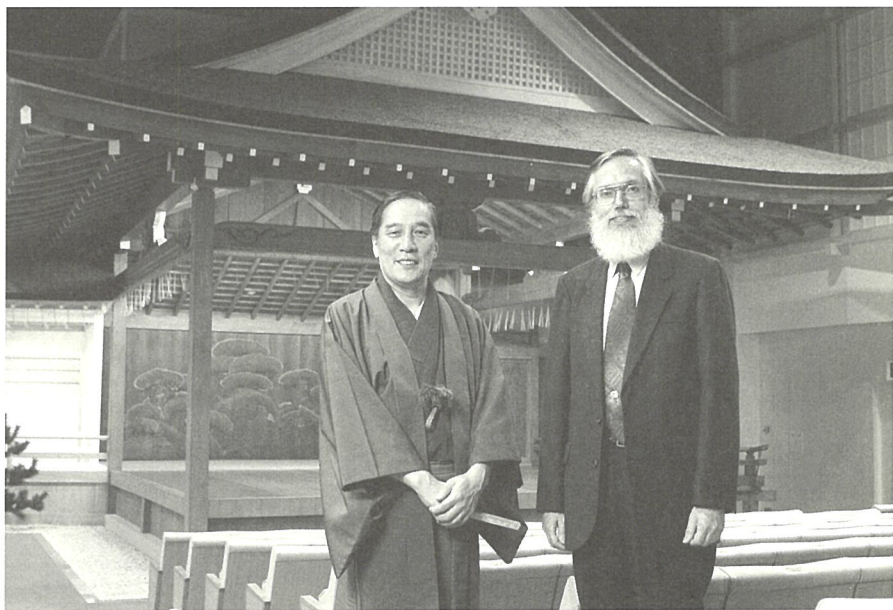
金剛 落成までの約二年間、自前の稽古場がないのがとても不便でしたので、正直ほつとしています。拠点の大切さを楽しみ感じました。

ティール 新しい能楽堂についてお聞かせください。

金剛 旧能楽堂は百四十年ほど前に建てられました。改修を何度か行いましたが、私が子供の頃からその老朽化による危険性が指摘されており、阪神大震災の影響もあって、改築を余儀

なくされました。ところが旧能楽堂の土地形状は法的に改築が不可能だとわかり、新しい場所へ引越してきたわけです。

以前は狭い路地の奥にあって、入りにくい雰囲気でしたので、今回、設計段階から心がけたのは、多くの人に気楽に入っていただける開かれた能楽堂にしたいということでした。そのため、設計も国内の多くの能楽堂を手掛けている東京の設計事務所をお願いしました。特に横浜能楽堂のように古い能舞台を解体して組み直すという経験をされているのが大きく、また、どうしても「入りやすい雰囲気にしたい」という思いと合致した訳です。そこでまず表の塀をなくしてガラス越しに内側が見えるようにし、間口を広げて、表通りからも見やすくしました。デザインも京都らしい和風を意識して、内装には障子や御



落成した新能楽堂で

簾をあしらっています。ゆつくり鑑賞していただけるよう、棧敷席だった客席もゆとりのある椅子席に変えました。さらに、分かりにくいといわれる能を少しでも理解してもらうため、イヤホンガイドも用意しました。六チャネルまで対応できるので、ゆくゆくは外国語のガイドも付けたいと考えています。

テイル 能楽施設では、イヤホンガイドはまだまだ珍しいですね。開かれた能楽をめざすという意味でも、イヤホンガイドは重要になってくるでしょう。ほかにはどんな特徴があるのでしょうか。

金剛 照明や音響なども最新の技術を取り入れました。コンピュータ制御により、ろうそく能（ろうそくの明かりを主にした舞台照明で行われる能のこと）を催す際の青い照明など、様々な照明が可能です。一方で、天井から自然光が入るようにしました。屋外で演じられ、自然と密接に結びついていた能本来の要素を加えています。また、ギャラリーには舞台写真などを飾り、年一度の虫干しの時候に能面や装束を展示する予定です。そして、もう一つの特徴が庭です。ここは元々個人の屋敷で、小川治兵衛作の庭があったのですが、それをそのまま残し、お客さまに見ていただけるようにしています。庭には石舞台があるので、いずれここで何かしたいとも考えています。

テイル 最新機能を備え、様々な工夫をこらした能楽堂に生まれ変わった訳ですが、明治期に建てられた能舞台は旧能楽堂からそのまま移転されたとか。

金剛 屋根を瓦屋根から檜皮葺に変え、後座（舞台後方の囃子方が座る所）や橋掛り（演者が出演する舞台左手後方の細長い通路）を広くしたり、古くなった木材を新しくしたもの、

ほぼ元通りに復元しました。踏みしめる音の反響をよくするために舞台床下に埋められている五個の壺も、旧能楽堂で使われていたものです。先人たちの思いが詰まり、私たちも稽古を重ねて踏み慣れた舞台で再びできることは、本当にうれしいことです。



能「翁」。老体の神が祝言・祝舞を行うめでたい内容で、神体である面をつけることで役者が神格を得る（舞台披露／撮影：牛窓正勝）

ティール 新能楽堂の出発を祝って、六月十八日に舞台披露が催され、各流派の宗家四人をはじめ、錚々たる方が舞を披露されました。この舞台披露というのは伝統的な行事なのでしょうか。

金剛 そうです。江戸幕府公認の四座（観世、宝生、金春、金剛）に喜多流を加えて能五流派といいますが、江戸幕府はこの五流に地方の猿楽を組み込みながら保護するという方法をとったのです。それ以来、大きな事業や行事は五流一緒に行うのが習わしになっています。

ティール 舞台披露の後、六月二十一、二十二日にも一般の方に向けた祝賀能が催され私も拝見いたしました。多くの方からの期待などをお感じになったことと思いますが、他にどのようなことをお

感じになりましたか。

金剛 一番強く感じたのは「通過点が無事に過ぎた」ということです。一つの能舞台は幕を下ろしましたが、新たな地に移転新築し、八百年ほどある金剛流の歴史が今後さらに何百年、何千年と続いていくための一つの通過点が過ぎた。そんな気持ち

ちでした。

「舞金剛」と呼ばれる華麗な流派

ティール 金剛流についてお聞かせいただけますか。能五流の中で、金剛流はどのような特徴があるのでしょうか。

金剛 金剛流の一番の特徴は、他流派に比べて舞が華やかな点です。動きが大きく、かつ動きも多いのです。そのため「舞金剛」と呼ばれています。ちなみに謡に関しては、宝生流に特徴があり、「謡宝生」と呼ばれます。また、金剛流は五流の中で唯一関西に拠点を置いているので、力強い江戸の能とは異なり、繊細で柔らかい芸風をもっています。

ティール 金剛家には、面や装束の名品も多く伝わっていますね。特に能面は百五十点以上所蔵されているそうですが、金剛さんの思い入れのある面などはありますか。

金剛 それぞれに好きで、これだとは言えませんが、ただ、能は女性が主役の演目が多いので、女の面を非常に大切にしています。

ティール 「雪の小面」や「孫次郎」などの逸品も女面ですね。

金剛 ええ。「雪の小面」は能好きだった豊臣秀吉が集め、雪、月、花の銘を付けた天下の三面の一つです。徳川家康に分け与えられた「月の小面」は江戸城本丸炎上で焼失したとされていますが、残る二面のうちの一つが金剛家に伝わっているのです。気品と色気を兼ね備えた若い女面「孫次郎」は、金剛孫次郎という太夫が若くして亡くなった妻の面影を偲んで作ったことか

ら、「面影」と呼ばれています。

ティール それぞれの面にエピソードや言い伝えがあるのでですね。

金剛 そうなのです。ほかに、「三光劇^{さんこうげき}」という老人面^{らうじんめん}があって、面にしみが現れると金剛家によくないことが起こると言う言い伝えがあるため、「しみ三光」と呼ばれています。また、今は金剛家のものではありませんが、盗んだ不動明王の像から作った面が顔から取れなくなり、無理やり外したので内側に血の跡が残ったと伝わる「肉付き不動面」、その面を使うと雨が降るといわれることから「雨降らしの面」と呼ばれる蛇の面もあります。

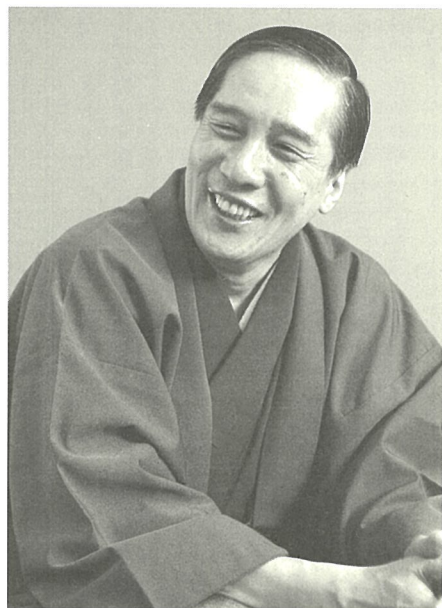
ティール 興味深いお話です。それだけ面には何か不可思議な力があるということなのでしょう。

金剛 そうかもしれません。信仰と結びつきたいわれが残る面がいくつもありますから。

人間の内面を描くのが能の醍醐味

ティール 金剛さんご自身、能に魅力を感じるのとはどんなところでしょうか。

金剛 私にとつては、謡も囃子も筋書もすべてが面白いのですが……。ただ、能の特徴はある一人の人間の人生や人間性を見せることなのです。他の演劇だと事件を重んじますよね。例えば、数人の人間が登場して、それぞれが関係し合い、事件が起こって、それがどう解決するか、というような。でも、能は事件を取り上げながらも、主題はその時の主人公の気持ち、つま



「能は理解するより、感じるもの」

りは内面なのです。その内面には恋愛感情もあれば嫉妬心や後悔、宗教心など、様々なものがあります。もちろん脇役も登場しますが、主人公と対立することもなく、脇役すら観客の一人となり、舞台上で主人公の内面が表されていくのです。これが他の演劇と違うところであり、能の魅力でもあります。ティール 昔の人間が主人公とはいえ、現代人も共感できるところがあるのでしょうか。

金剛 平安時代を題材にした演目が多いのですが、結局、昔も今も人間の本質は変わらないということですね。

ティール 難しいといわれる能ですが、一般の人にどんなところを分かってほしいとお考えですか。

金剛 よく能をどうしたら理解できますかと聞かれるのですが、能は理解するというよりは、感じるものなのかもしれないませ

ん。謡や囃子をいと思う人もいれば、能面の表情や装束の美しさにひかれる人もいます。筋書を理解できなくても、それぞれがここがいい、ここが好きだと感じられるものがあればいいのではないのでしょうか。

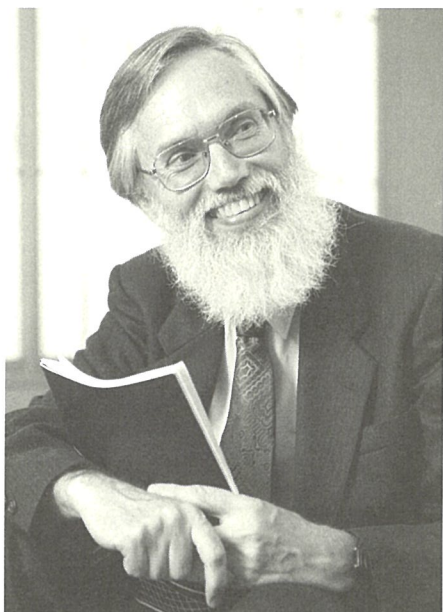
ティール 分かるような気がします。ところで、能を見始めたばかりのころはよく眠くなったのですが（笑）、それと同時にすーっと別世界に入っていくような、不思議な感覚に襲われました。

金剛 筋書が変化に富んだ劇能と呼ばれるものもありますが、大半が夢幻のうちに主人公の懐旧談を見せる夢幻能と呼ばれるものです。観客も夢の世界に吸い込まれるのかもしれないですね。

日本のなものを日本人の中に残すという使命

ティール 現代の能について少しお聞かせください。現代の能は、一般の人にとってどのような意味や役割があるとお考えでしょうか。

金剛 能は、今我々が考えるところの日本文化が生まれた時代、つまり室町時代に確立されたものです。それ以前は、中国的要素の強いものが多く、能をはじめ、茶道や華道、香道といった中国から入った文化に独自性が加わり、日本化したのは室町時代なのです。日本的なものの代表であり、日本のオリジナリティーが存在するのが能だと私は考えています。戦後、日本は生活自体が西洋化されましたが、そんな時代にあって、能は日本人の中に日本的なものを残す役目を果たすのではないのでしょうか。



「能を見始めた頃は眠くなった(笑)」

ティール 海外でも積極的に公演を開き、金剛流の魅力を紹介されています。

金剛 おかげさまでアメリカやカナダ、イタリア、フランス、スペイン、また、オーストラリアやイスラエルと、様々な国で公演し、ご好評いただいています。また、ローマ帝国時代の遺跡である野外劇場でも公演させていただいたことがあります。この時は古代の人々も芝居を楽しんでいたのだと感慨深く思いました。

ティール 海外での公演は、やはり国際化を意識されてのことなのでしょうか。

金剛 国際社会では、それぞれの国の文化や国民性を互いに理解し合い、尊重し合うことが必要です。そのためにも、日本文化の代表である能を広く知ってもらうことは大切だと考えて

います。

ティール 確かにおっしゃる通りですね。私は最近、国際社会の中にあつて、特に日本文化が見直されているような気がしています。一昨年、能がユネスコの世界無形文化遺産に登録されましたね。

金剛 光栄なことです。存続が危ぶまれるという理由ではなく、より芸術性が高いものを継承しようという目的で選ばれたことがうれしいですね。能が国際社会の中で重要な役割を果たすべく、よりいっそう努力していかなければと思っています。

若い世代が能に触れる機会を

ティール 金剛さんは中学、高校、大学と同志社で学ばれましたが、同志社時代の印象深い思い出などを伺えますか。

金剛 これは大学時代ですが、謡曲の研究で有名な故・里井陸郎先生の講義を興味深く聴いていたのを覚えています。また、能楽師でありながら『風姿花伝』をきちんと読んでいなかったのですが、英訳の『風姿花伝』について故・宮井敏先生が講義をされていて、この講義を通して、じっくりと読むことができました。

ティール 学生時代も、舞台上に立たれていたのですか。

金剛 ええ、もちろん。そのため学校を欠席することもありましたが、同志社には温かく寛容な目で見守っていただいていたと思います。

ティール 四歳の時に初舞台を踏まれて以来、能一筋にこられたことと思いますが、別のことがしたい、寄り道してみたい

とお思いになったことはないのでしょうか。

金剛 これといつてはないですね。音楽が好きで、今でもよくオペラを聴くのですが、楽器の演奏をしないので、寄り道するまではいかなくて。お茶なども少しかじった程度です。

ティール 新能楽堂が同志社と近くなりました。何か要望などがありましたら、お聞かせください。

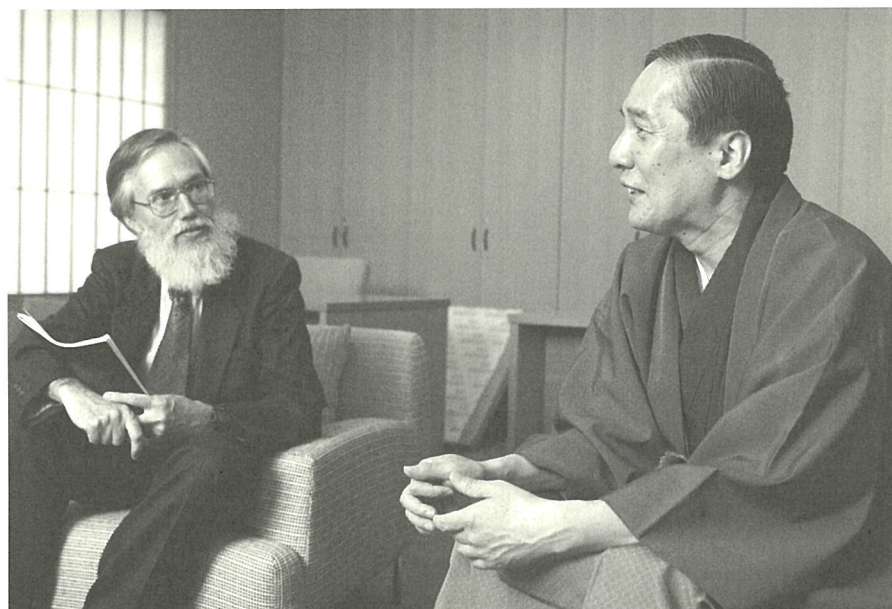
金剛 もちろん、私どもも積極的に鑑賞会を開くつもりですが、学校側でも、中学生や高校生などの若い世代の人が能に触れる機会を用意していただければと思います。同志社には金剛流のクラブがあり、そこからプロの能楽師をめざす人もいます。そういうクラブ活動を活発にすることも、能の発展にもつながるのではないのでしょうか。

これからの金剛流

ティール ホームページ(※)でスケジュールを拝見しました。ずいぶんお忙しいですね。

金剛 装束を着て舞うのは大変なので、昔は夏の公演はお休みでした。そのため、夏は「農閑期」をもじって「能閑期」と呼び、もっぱら舞の稽古に専念していました。逆に、寒い時期は声の鍛錬に向いているので、寒稽古といえ謡の稽古を指していたのです。でも今では冷暖房設備が整っていますから、こういうこともあまり関係なくなり、夏でも公演を行っています。今後は新能や大文字能など、夏の公演が控えています。

ティール 新能楽堂の完成を契機に、若い人や外国人の方をはじめ、誰にでも開かれた能楽堂をめざされているとお聞きし



「同志社の若い方たちにも能に親しんでいただきたいですね」



祝賀能では長男の龍謹さん(右)と、親獅子が子獅子を谷底にけ落として力を試すという「石橋」を豪快に舞った(撮影：牛窓正勝)

ました。具体的にはどのような取り組みをお考えですか。

金剛 能が難しいといわれるのは、見ていても何をやっているかが分からないからだと思うのです。さきほど、能は理解するより感じるものだと言いましたが、やはり能に親しむ第一歩として、「理解」という点を重んじてもいいのではないかと。そんな思いもあって、イヤホンガイドを設置しました。今後はイヤホンガイドを活用して、若い世代や留学生の方を対象にした鑑賞会を積極的に開きたいと考えています。また、毎年一回京都国際交流センターが観世会館に留学生を招いて会を開き、そこに金剛流と観世流とが一年ごとに出演しているのですが、この会でどれだけの方に見ていただいているのか、まだまだ会が足りないのかといったことも、きちんと把握しなければなりません。さらに、二年ほど先には京都御苑内に迎賓館が完成しますが、そこを訪れる外国人の方々にも能を見ていただければと思います。

ティール 益々お忙しくなりそうですね。

金剛 はい。それに、古典はもちろん、復曲能や新作にもどんどん挑戦したいと思っています。せっかくなばらしい施設になったのですから、いい舞台をお見せしていかないと。

ティール 一ファンとしては楽しみな限りです。これからのご活躍を期待しています。本日はどうもありがとうございました。

金剛 こちらこそありがとうございました。みなさんの期待にお応えできるよう、精進してまいります。

(二〇〇三年七月七日収録)

(※) <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/ijiri/>